

世田谷区における地域活動参加者/非参加者の属性把握と

地域活動への参加につながる要因の探索

——「地域生活とコミュニティに関する調査 2024」の調査結果を基に——

西田 祐志郎

せたがや自治政策研究所研究員

[概要]

2024年に実施した「地域生活とコミュニティに関する調査 2024」(以下 24 年度調査)において、地域活動に参加しているかという参加の有無と、地域活動に参加したいかという参加意欲に関する設問があった。これらの設問を元に、本研究では、地域活動に参加する層としない層それぞれの年齢や性別といった基本的な属性や 24 年度調査の回答の傾向から、その特徴を捉えることを目的として探索的な分析を行った。また、地域活動への参加意欲があり実際に参加している層(以下アクティブ層)と、地域活動への参加意欲があるにもかかわらず実際に参加していない層(以下潜在層)の比較を行うことで、地域活動への参加/不参加即ちアクティブ層と潜在層とを分けている要因がみられるか探った。

分析の結果、「日頃から親しくしている近所の人がある」「まちの人は仲間だという意識」「子と同居」「災害ボランティア経験あり」「年齢が上がる」「災害時に住民同士で助けあえるという意識」の 6 つの要因が挙げられた。

1. はじめに

長年にわたり問題視されている地域活動の担い手不足や住民同士のつながりの希薄化は、世田谷区も例外ではない。2024 年度に策定した『世田谷区基本計画』においても、「区民生活については、人と人とのつながりの希薄化や町会・自治会への加入率低下が進むなか、長期化するコロナ禍が地域コミュニティの分断に追い打ちをかけてきたことで、社会的な孤立や孤独が大きな問題」(世田谷区 2024)としている。その背景を踏まえ、区政が目指すべき方向性の一つとして「参加と協働を区政の基盤とし、公共的役割を担い地域を支えている町会・自治会や商店街、世田谷が誇る抱負な地域人材や地域資源などとの連携強化により参加と協働のさらなる促進を図りながら、乳幼児から高齢者までのあらゆる世代が安心して住み続けられるまちづくりを進める」(世田谷区 2024)と、基本方針に掲げている。また、計画の理念にも「区民を施策の対象として捉えるのではなく、自ら地域をつくり支える存在として位置づけ、主体的な参加への意欲を引き出すコミュニティづくりにつなげます」(世田谷区 2024)とあり、区民の地域参加の促進を重要な課題として位置付けている。

地域活動における参加と協働のあり方という点では、過去に当研究所でも調査研究のテーマとして取り組んできた。2007 年度には、団塊の世代を対象として、地域活動への参加

を拡充するための手法についての調査研究の実施や、その翌年には地域活動団体への聞き取り調査の実施、2011 年度には区内在住の外国人を対象として、地域活動への参加拡充の手法について他所管課との共同研究の実施、2014 年度には世田谷区の市民活動団体を対象とした郵送調査の実施とその結果の分析がなされてきた。

2024 年 10 月に当研究所で実施した 24 年度調査では、地域活動の参加に関する設問があり、実際の参加の有無という「行動」と、参加意欲という「意識」を問うている。そこで、住民の地域活動への参加と行政との協働を促す糸口を探るべく、本研究では、地域活動に参加する層としない層それぞれの年齢や性別といった基本的な属性や 24 年度調査の回答の傾向からその特徴を捉えることを目的とした。また、地域活動への参加意欲があり実際に参加している層（本研究ではアクティブ層と呼称）と、地域活動への参加意欲があるにもかかわらず実際に参加していない層（本研究では潜在層と呼称）の比較を行うことで、参加意欲があるにもかかわらず地域活動への参加/不参加即ちアクティブ層と潜在層とを分けている要因を探る。本研究でいう潜在層のような、地域活動への参加意欲があるにもかかわらず実際に参加していない層を対象とした先行研究は多くは見受けられず、とりわけ世田谷区を対象としている点で、本研究の独自性があるといえよう。ただ、本研究の位置づけとしては探索的に行った分析であり、因果推論を目的としていない。あくまで仮説の生成を主眼とし、その検証は今後の研究につなげるものとした。

2. 「地域生活とコミュニティに関する調査 2024」の概要

本研究で用いた 24 年度調査の概要については表 1 の通りである。24 年度調査は、地区・地域別の区民の生活の実態を把握することを目的として実施した。また、回収率向上を図るべく、10 月 15 日にすべての対象者へ向けてはがきで督促依頼を出している。

表 1 「地域生活とコミュニティに関する調査 2024」概要

調査目的	地域社会における人との関わりと地域活動の実態の把握
調査期間	2024 年 10 月 1 日～10 月 30 日
対象者	2024 年 8 月 1 日時点で住民基本台帳に登録されている 18 歳以上 85 歳未満の世田谷区民 12,000 名（外国籍含む）
有効回答数（率）	4,614 件（38.4%）
抽出方法	単純無作為抽出
調査方法	郵送法（調査票を対象者宅へ郵送で配布・回収する方法）
設問数	55 問

次に、標本の代表性をみるべく、母集団である世田谷区全体と年齢別及び性別で比較したものが図 1、2 である。なお、区の人口は 2024 年 8 月 1 日時点で住民基本台帳に登録されている世田谷区民のデータを基にしている。

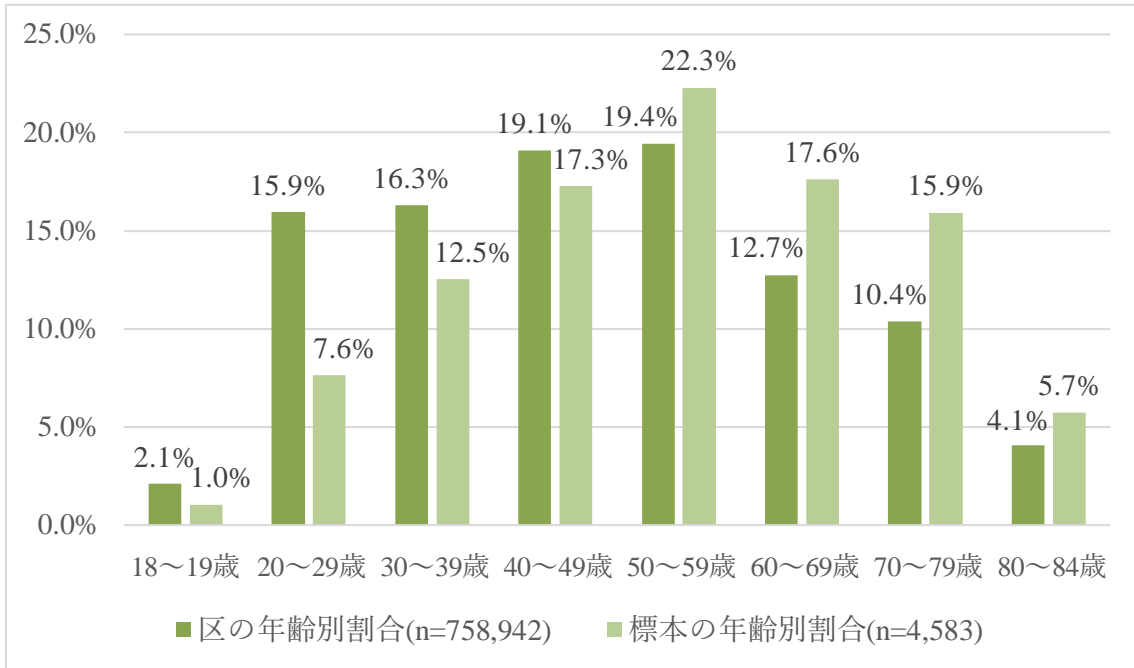


図1 区全体と標本の年齢別構成比較

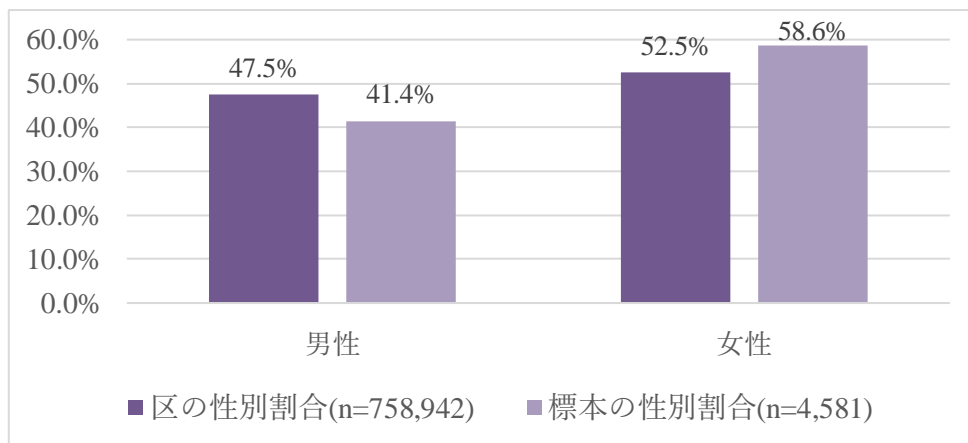


図2 区全体と標本の性別構成比較

図1より、区全体と比べて標本は40代以下が少なく50代以降が多い。特に、20代の回答の少なさ、60代・70代の回答の多さが目立つ。また、図2より男性が少なく女性が多いことが分かる。これらの結果より、標本の母集団の代表性が担保されているとはいえない点は念頭に置かれない。

3. 分析の概要

分析の対象としている潜在層のグルーピングの方法は次の通りである。24年度調査の設問にある問20「あなたは、次あげる(a)～(h)のお住まいのまちの活動をどの程度参加していますか」、問21「今後、あなたは次あげる(a)～(h)のお住まいのまちの活動に参加した

いと思いませんか」という二つの問いの回答をそれぞれ「参加する/参加しない」「参加したい/参加したくない」の二択に加工し、2×2の4つのグループに分けた(表2)。例えば、問20では「参加しない」、問21では「参加したい」に該当する回答者は潜在層に相当する。

表2 地域活動の参加と参加意欲の有無を元にした回答者の層分け

		問20		必ず参加する	できるだけ参加する	あまり行かない	行ったことがない
		問21		参加する		参加しない	
参加したい	参加したい			アクティブ層		潜在層	
できるだけ参加したい							
あまり参加したくない	参加したくない			義務層		消極層	
参加したくない							

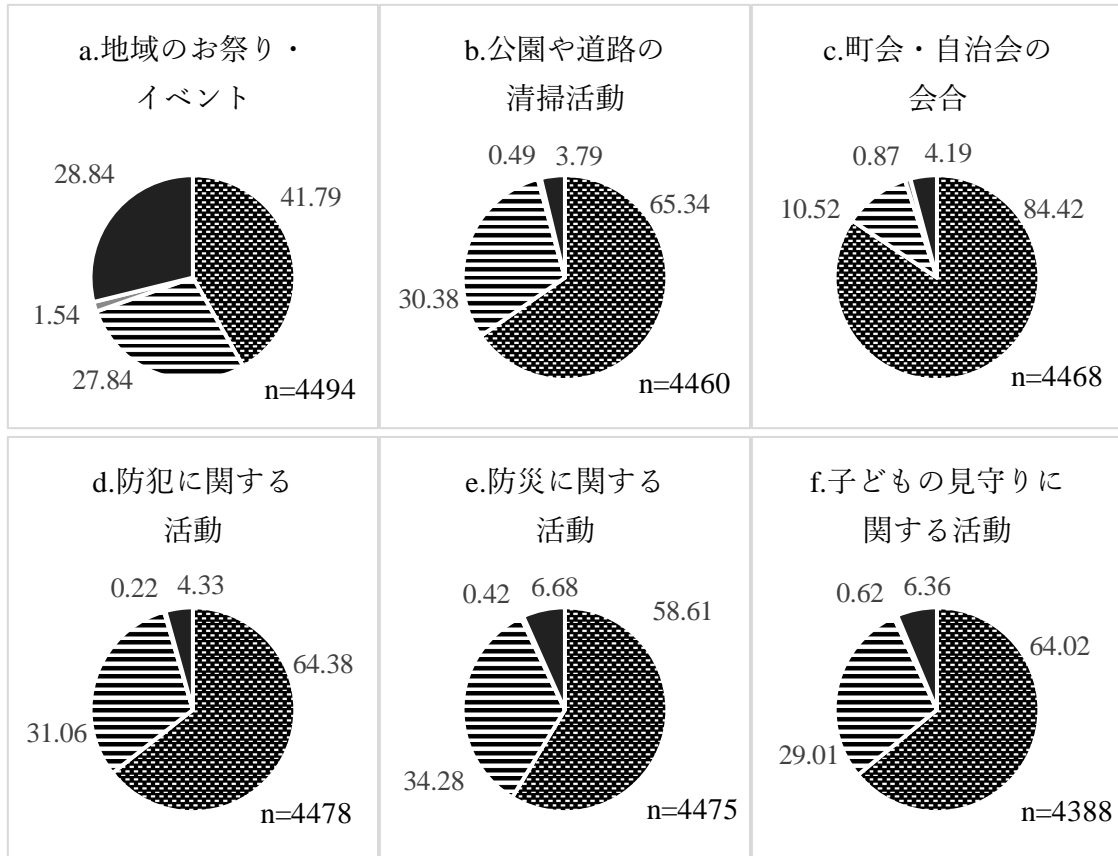
なお、各層の呼称については、その単語の意味の通りの人々であるということを必ずしも意味せず、設問の組み合わせからイメージできるニュアンスの掴みややすさと、差し当たって各層を区別するための程度のものであり、この報告書で厳密な定義づけを意図するものではないことをことわっておく。

基礎属性を捉える方法は、年齢や性別などの基礎属性となる変数と4つの層で行うクロス集計、その結果を元に独立性の検定をし、変数同士に有意な関連が認められれば残差分析をして、どの属性がその関連に寄与しているか確認する流れで行う。潜在層の傾向を捉える分析方法は、24年度調査の標本が設問によってどの層に該当しやすいかをみるため、多項ロジスティック回帰分析を行う。さらに、アクティブ層と潜在層の比較をするため、要因となり得そうな複数の設問を説明変数とし、アクティブ層か潜在層かの二項値(1=アクティブ層、0=潜在層)を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を行う。アクティブ層と潜在層の違いをみることにより、潜在層が実際に地域活動に参加する(即ちアクティブ層に変化し得る)ための要因を析出できるのではと考える。なお、本分析ではHADというExcelのVBAを利用したフリープログラムを使用する(清水 2016)。

4. 分析の結果

4.1 地域活動別の各層の構成

問20、21いずれもa~hの8種の地域活動ごとに問うているため、4つの層に分けた際に各層に該当する度数もそれぞれで異なる。本研究では、a~hのうち、選挙の投票を除いたa~fの地域活動を対象にしている。それぞれの呼称を、a.お祭り、b.清掃、c.町会・自治会、d.防犯、e.防災、f.見守りとする。また、地域活動別の4層の構成は以下の通りである。



■消極層 ■潜在層 ■義務層 ■アクティブ層

図3 地域活動別4層の構成割合(単位:%)

4層の割合の大まかな傾向として、消極層>潜在層>アクティブ層>義務層となっている(aは異なるが)。また、a~fの各層の割合の重み付き平均¹は、消極層が約63.07%、潜在層が約27.18%、義務層が約0.69%、アクティブ層が約9.06%であった。ここで、義務層の度数がいずれも30以下と少数であるため、分析結果としては掲載するが考察や言及の対象からは除外することを前置きしておく。

4.2 各層の基礎属性の把握

次に、各層の基礎属性の把握のためクロス集計を行った。年齢、性別、世帯構成の3つを基礎属性として取り上げ、順に結果を示していく。また、独立性の検定結果は各クロス表の右下に、残差分析で有意な結果となったセルは表中に△▼を付して示す。

¹ 計算式は、(a~fの各層の度数の合計)÷(a~fの各総度数nの合計)。

4.2.1 年齢とのクロス集計

a. 地域のお祭り・イベント									
	18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～84歳	合計度数
消極層	0.75%	▼5.68%	▼8.41%	▼12.38%	23.63%	△22.29%	△19.72%	△7.13%	1866
潜在層	1.36%	△12.52%	14.04%	17.17%	24.32%	16.53%	▼11.48%	▼2.57%	1246
義務層	2.90%	▼1.45%	8.70%	17.39%	28.99%	17.39%	17.39%	5.80%	69
アクティブ層	1.09%	6.62%	△18.15%	△25.62%	▼19.24%	▼12.07%	▼13.32%	▼3.89%	1284
全体	1.05%	7.79%	12.79%	17.60%	22.64%	17.67%	15.54%	4.90%	4465

$$\chi^2(21) = 322.748, p < .05$$

b. 公園や道路の清掃活動									
	18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～84歳	合計度数
消極層	1.21%	△8.76%	12.90%	17.24%	▼20.83%	17.97%	△16.10%	5.00%	2900
潜在層	0.82%	6.71%	14.02%	18.72%	△27.67%	17.67%	▼11.56%	▼2.83%	1341
義務層	0.00%	0.00%	4.55%	18.18%	18.18%	13.64%	△31.82%	13.64%	22
アクティブ層	0.60%	▼2.38%	▼3.57%	16.07%	17.86%	14.88%	△27.38%	△17.26%	168
全体	1.06%	7.85%	12.84%	17.65%	22.77%	17.74%	15.23%	4.85%	4431

$$\chi^2(21) = 154.295, p < .05$$

c. 町会・自治会の会合									
	18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～84歳	合計度数
消極層	△1.23%	△8.35%	△13.72%	17.85%	22.68%	17.35%	▼14.49%	▼4.32%	3747
潜在層	0.21%	7.07%	10.71%	19.91%	25.48%	17.34%	15.20%	4.07%	467
義務層	0.00%	0.00%	2.63%	▼5.26%	21.05%	△36.84%	23.68%	10.53%	38
アクティブ層	0.00%	▼0.53%	▼2.14%	▼9.63%	▼16.04%	22.46%	△31.02%	△18.18%	187
全体	1.06%	7.82%	12.82%	17.62%	22.69%	17.73%	15.34%	4.93%	4439

$$\chi^2(21) = 180.946, p < .05$$

d. 防犯に関する活動									
	18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～84歳	合計度数
消極層	△1.36%	△8.62%	△13.53%	17.61%	22.11%	▼16.74%	15.10%	4.92%	2867
潜在層	▼0.58%	6.67%	12.75%	18.12%	24.42%	△20.00%	14.20%	▼3.26%	1380
義務層	0.00%	0.00%	0.00%	10.00%	10.00%	40.00%	30.00%	10.00%	10
アクティブ層	0.00%	▼3.65%	▼2.08%	15.10%	19.27%	15.10%	△28.13%	△16.67%	192
全体	1.06%	7.78%	12.77%	17.64%	22.68%	17.73%	15.42%	4.92%	4449

$$\chi^2(21) = 136.472, p < .05$$

e. 防災に関する活動									
	18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～84歳	合計度数
消極層	1.30%	△8.93%	△13.77%	17.68%	21.97%	▼16.60%	14.65%	5.10%	2608
潜在層	0.72%	6.76%	12.93%	18.24%	△24.93%	19.03%	14.17%	▼3.22%	1524
義務層	0.00%	0.00%	5.26%	10.53%	5.26%	31.58%	△36.84%	10.53%	19
アクティブ層	0.68%	▼3.39%	▼4.07%	14.92%	18.98%	19.66%	△26.78%	△11.53%	295
全体	1.06%	7.78%	12.80%	17.66%	22.72%	17.70%	15.38%	4.90%	4446

$$\chi^2(21) = 125.378, p < .05$$

f. 子どもの見守りに関する活動									
	18～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～79歳	80～84歳	合計度数
消極層	1.14%	△9.19%	▼11.58%	▼15.15%	22.23%	△18.66%	△16.58%	△5.47%	2798
潜在層	1.11%	▼6.60%	△17.01%	19.24%	22.10%	17.17%	13.67%	▼3.10%	1258
義務層	0.00%	0.00%	▼0.00%	△33.33%	△48.15%	7.41%	3.70%	7.41%	27
アクティブ層	0.00%	▼1.45%	▼7.97%	△36.96%	△28.26%	▼10.51%	▼10.51%	4.35%	276
全体	1.06%	7.89%	12.85%	17.83%	22.73%	17.64%	15.28%	4.73%	4359

$$\chi^2(21) = 176.454, p < .05$$

※△：有意に多い ▼：有意に少ない（有意水準：0.05）

※各セルの%がつく値は、行比率を示している。

図4 年齢と各層のクロス集計結果と独立性の検定・残差分析の結果（地域活動別）

独立性の検定とは、二つのカテゴリ変数に関連があるかを統計的に判断するものである。図4を例にすると、a～fの設問毎で表側にある「4つの層」と、表頭にある「年齢」との間に関連があるのかどうかを確かめる。具体的に説明すると、f.見守りにおいて、20～29歳は全体の7.89%いることがわかる。ここで、4つの層と年齢に何も関連がない即ちどちらも影響を与えない独立した関係ということであれば、各層の20～29歳の割合も同様に7.89%のはずである。しかし、調査で得られた実際の値（観測値）は、その割合とは異なる値を取っている。その差は各層、各年齢によってみられ、それらの差は「4つの層」と「年齢」という二つの変数の間に何かしらの関連があるから生じたのか、ということの独立性の検定で統計的に判断することができる。結果として、a～fいずれも統計的に有意に関連があることが確認された²。次に、二変数のうちどの層のどの年齢で差を生んでいるのかを探るべく、残差分析を行う。

残差分析は、観測値と期待値の差が統計的に有意であるかを分析するものである。こちらでも本研究に合わせて具体的に説明すると、f.見守りにおける20～29歳は全体の7.89%（期待値に相当）であるのに対し、消極層の20～29歳は9.19%（観測値に相当）であることが図4からわかる。この差が、その層と年齢との影響で生まれた“意味ある差”（＝有意に差がある）なのかを統計的に判断している。

それらを踏まえて残差分析の結果をみると、アクティブ層は、a.お祭り以外において20～30代がいずれも有意に少ない。対して、a.お祭り、c.町会・自治会以外では40～50代が有意差なしまたは有意に多い。また、a.お祭り、f.見守り以外では70代以上が有意に多い。このことから、アクティブ層は高齢の回答者の割合が表中の「全体」の行の割合に比べて多い傾向にあることがうかがえる。潜在層については、a.お祭りでは20代、f.見守りでは30代、b.清掃、e.防災では50代、d.防犯では60代が有意に多く、70代は有意差がない又は有意に少ない。このことから、潜在層への年齢の影響は他の層と比べると小さいことがうかがえる。

² ただ、サンプルサイズが大きいゆえにp値が小さく算出されやすいという性質もあるため、以降の独立性の検定結果もそれを含み置いた上で参照されたい。

また、潜在層に限ったことではないが、年齢よりも地域活動の種類による影響があるとも推測される。消極層は、a.お祭りを除いていずれも20代が有意に多い。30代もc.町会・自治会、d.防犯、e.防災で有意に多い。このことから、30代以下の若年世代は消極層である傾向があることがうかがえる。

4.2.2 性別とのクロス集計

a. 地域のお祭り・イベント				b. 公園や道路の清掃活動			
	男性	女性	合計度数		男性	女性	合計度数
消極層	△43.93%	▼56.07%	1862	消極層	△43.23%	▼56.77%	2894
潜在層	41.72%	58.28%	1244	潜在層	▼36.80%	△63.20%	1345
義務層	37.68%	62.32%	69	義務層	45.45%	54.55%	22
アクティブ層	▼37.58%	△62.42%	1288	アクティブ層	41.67%	58.33%	168
全体	41.38%	58.62%	4463	全体	41.23%	58.77%	4429
$\chi^2(3) = 13.121, p < .05$				$\chi^2(3) = 15.819, p < .05$			
c. 町会・自治会の会合				d. 防犯に関する活動			
	男性	女性	合計度数		男性	女性	合計度数
消極層	▼40.43%	△59.57%	3745	消極層	△43.38%	▼56.62%	2863
潜在層	△47.42%	▼52.58%	466	潜在層	▼36.47%	△63.53%	1382
義務層	51.28%	48.72%	39	義務層	50.00%	50.00%	10
アクティブ層	43.85%	56.15%	187	アクティブ層	43.75%	56.25%	192
全体	41.40%	58.60%	4437	全体	41.26%	58.74%	4447
$\chi^2(3) = 10.466, p < .05$				$\chi^2(3) = 19.210, p < .05$			
e. 防災に関する活動				f. 子どもの見守りに関する活動			
	男性	女性	合計度数		男性	女性	合計度数
消極層	△44.12%	▼55.88%	2604	消極層	△43.16%	▼56.84%	2792
潜在層	▼36.24%	△63.76%	1526	潜在層	39.67%	60.33%	1263
義務層	42.11%	57.89%	19	義務層	▼22.22%	△77.78%	27
アクティブ層	42.57%	57.43%	296	アクティブ層	▼32.00%	△68.00%	275
全体	41.30%	58.70%	4445	全体	41.31%	58.69%	4357
$\chi^2(3) = 24.895, p < .05$				$\chi^2(3) = 19.231, p < .05$			

※△：有意に多い ▼：有意に少ない 有意水準：0.05

※各セルの%がつく値は、行比率を示している。

図5 性別と各層のクロス集計結果と残差分析（地域活動別）

独立性の検定の結果、a～f いずれも二変数に有意に関連があることが確認されたため、残差分析を行う。

残差分析の結果をみると、アクティブ層において、a.お祭り、f.見守りで女性が有意に多い。潜在層において、有意差があるもののうち、c.町会・自治会以外女性が有意に多い。消極層において、c.町会・自治会以外はいずれも男性が有意に多い。

これらのことから、女性の方が地域活動に参加している傾向があり、対して男性は地域活動に参加していない傾向があることがうかがえる。

4.2.3 世帯構成とのクロス集計

a. 地域のお祭り・イベント							
	1人暮らし	夫婦2人	夫婦と子ども	一人親世帯	3世代世帯 (親と子と孫)	その他	合計度数
消極層	△23.02%	△29.81%	▼29.49%	4.75%	▼4.38%	△8.55%	1872
潜在層	△23.07%	28.22%	▼32.15%	4.42%	4.34%	7.80%	1244
義務層	15.94%	24.64%	46.38%	2.90%	8.70%	1.45%	69
アクティブ層	▼8.94%	▼21.37%	△53.30%	▼2.87%	△7.15%	▼6.37%	1287
合計	18.87%	26.86%	37.34%	4.09%	5.23%	7.60%	4472

$$\chi^2(15) = 277.635, p < .05$$

b. 公園や道路の清掃活動							
	1人暮らし	夫婦2人	夫婦と子ども	一人親世帯	3世代世帯 (親と子と孫)	その他	合計度数
消極層	△20.59%	26.80%	▼34.91%	△4.76%	5.00%	7.93%	2899
潜在層	▼15.70%	26.59%	△42.52%	▼3.11%	5.04%	7.04%	1350
義務層	4.55%	22.73%	54.55%	4.55%	13.64%	0.00%	22
アクティブ層	17.47%	27.71%	36.75%	2.41%	△9.04%	6.63%	166
合計	18.91%	26.75%	37.39%	4.17%	5.21%	7.57%	4437

$$\chi^2(15) = 48.647, p < .05$$

c. 町会・自治会の会合							
	1人暮らし	夫婦2人	夫婦と子ども	一人親世帯	3世代世帯 (親と子と孫)	その他	合計度数
消極層	△19.53%	26.48%	37.35%	4.18%	▼4.85%	7.62%	3754
潜在層	▼15.17%	25.21%	△42.31%	4.06%	5.98%	7.26%	468
義務層	12.82%	△41.03%	33.33%	0.00%	2.56%	10.26%	39
アクティブ層	16.22%	△35.68%	▼27.03%	4.32%	△10.81%	5.95%	185
合計	18.87%	26.86%	37.40%	4.14%	5.20%	7.53%	4446

$$\chi^2(15) = 39.064, p < .05$$

d. 防犯に関する活動							
	1人暮らし	夫婦2人	夫婦と子ども	一人親世帯	3世代世帯 (親と子と孫)	その他	合計度数
消極層	△20.70%	26.18%	▼36.04%	△4.71%	▼4.67%	7.70%	2869
潜在層	▼16.16%	27.56%	△40.33%	▼2.96%	5.63%	7.36%	1386
義務層	10.00%	30.00%	30.00%	△20.00%	0.00%	10.00%	10
アクティブ層	▼13.16%	30.00%	36.32%	3.68%	△10.00%	6.84%	190
合計	18.95%	26.78%	37.37%	4.15%	5.19%	7.56%	4455

$$\chi^2(15) = 44.811, p < .05$$

e. 防災に関する活動							
	1人暮らし	夫婦2人	夫婦と子ども	一人親世帯	3世代世帯 (親と子と孫)	その他	合計度数
消極層	△21.15%	▼25.56%	▼36.13%	△4.75%	4.67%	7.74%	2610
潜在層	▼16.15%	28.32%	△39.57%	3.34%	5.43%	7.19%	1529
義務層	11.11%	44.44%	33.33%	0.00%	11.11%	0.00%	18
アクティブ層	▼13.90%	30.17%	37.29%	3.05%	△8.14%	7.46%	295
合計	18.91%	26.89%	37.38%	4.13%	5.19%	7.50%	4452

$$\chi^2(15) = 42.558, p < .05$$

f. 子どもの見守りに関する活動							
	1人暮らし	夫婦2人	夫婦と子ども	一人親世帯	3世代世帯 (親と子と孫)	その他	合計度数
消極層	△23.07%	△29.05%	▼29.94%	△4.69%	▼4.30%	△8.95%	2792
潜在層	▼13.42%	▼23.84%	△47.36%	3.39%	5.92%	▼6.08%	1267
義務層	▼0.00%	18.52%	△62.96%	0.00%	△14.81%	3.70%	27
アクティブ層	▼2.87%	▼12.19%	△69.89%	2.87%	△11.11%	▼1.08%	279
合計	18.83%	26.39%	37.75%	4.17%	5.27%	7.58%	4365

$$\chi^2(15) = 340.143, p < .05$$

※△：有意に多い ▼：有意に少ない 有意水準：0.05

※各セルの%がつく値は、行比率を示している。

図6 世帯構成と各層のクロス集計結果と残差分析（地域活動別）

独立性の検定の結果、a～f いずれも二変数に有意に関連があることが確認されたため、残差分析を行う。

残差分析の結果をみると、アクティブ層において、(c.町会・自治会は異なるが) 有意差があるもののうち、有意に多い世帯は夫婦と子ども世帯、または3世代世帯、あるいはその両方の世帯であった。潜在層において、a.お祭り以外で夫婦と子ども世帯が有意に多く、一人暮らし世帯が有意に少ない。両世帯は逆の有意差を示している。消極層において、a～f いずれも

れも一人暮らし世帯が、a.お祭り、c.町会・自治会以外で一人親世帯が有意に多い。

このことから、アクティブ層と潜在層、つまり地域活動に参加意欲がある層は子どもと同居していることが共通点として考えられる。消極層で有意に多かった一人親世帯も子どもと同居していると捉えられるが、アクティブ層と潜在層では有意差がない又は有意に少ないため、一人親世帯は地域活動に参加意欲がある層には該当しなさそうであることがうかがえる（ただし、参加意欲がないと言いきるわけではない）。

4.3 各層の傾向—多項ロジスティック回帰分析—

a～fそれぞれの地域活動において、どの説明変数によってどの層に属する傾向があるかを見るべく、多項ロジスティック回帰分析を行った。説明変数には、地域活動に対する意識や行動に影響があると考えられる設問として、問29「あなたが住んでいるまちについて感じること³」の6種を置いた。また、統制変数として、基礎属性である年齢と性別を置いた。目的変数には、地域活動a～fの6種それぞれに1=消極層、2=潜在層、3=義務層、4=アクティブ層の4択とした名義尺度の変数を置き、そのうちの消極層を基準カテゴリとした。なお、いずれの説明変数もVIFは2未満であったため、多重共線性の問題はないと考えて差し支えなさそうである。

³ 4件の順序尺度であり、分析には順序を逆転させて用いている。

表3 多項ロジスティック回帰分析の結果(表中の値はオッズ比)

対象層	説明変数	a.お祭り	b.清掃	c.町会・自治会	d.防犯	e.防災	f.見守り
潜在層	まちの悪口を言われたら、自分の悪口を言われた気になる	1.039	0.930 +	0.977	1.024	1.054	0.901 *
	このまちの人たちはみんな仲間だという気がする	1.109	0.990	1.005	0.990	0.875 *	1.044
	このまちのためになることをして何か役に立ちたい	2.071 **	4.710 **	4.027 **	2.868 **	2.785 **	2.909 **
	もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる	1.039	1.044	1.005	1.138 *	1.133 *	1.067
	このまちの人たちは信頼できる	0.970	1.111	1.129	1.048	1.091	1.122 +
	このまちに対して愛着がある	1.108 +	0.835 **	0.885	0.944	0.955	0.982
	年齢(10歳毎)	0.686 **	0.880 **	0.985	0.966	0.974	0.850 **
性別(1=男性, 0=女性)	0.948	0.713 **	1.269 *	0.704 **	0.680 **	0.835 *	
アクティブ層	まちの悪口を言われたら、自分の悪口を言われた気になる	1.058	0.911 +	0.909	0.989	0.957	0.943
	このまちの人たちはみんな仲間だという気がする	1.441 **	0.686 **	1.455 **	1.469 **	1.140	1.102
	このまちのためになることをして何か役に立ちたい	2.546 **	1.984 **	4.007 **	4.595 **	4.686 **	3.287 **
	もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる	1.192 **	0.728 **	1.262 +	1.457 **	1.559 **	1.419 **
	このまちの人たちは信頼できる	0.973	1.975	0.834	0.915	1.057	1.249 +
	このまちに対して愛着がある	1.259 **	0.915	1.027	0.945	0.825	0.874
	年齢(10歳毎)	0.656 **	1.484 **	1.708 **	1.381 **	1.289 **	0.860 **
性別(1=男性, 0=女性)	0.757 **	1.026 +	0.946	0.790	0.765 *	0.577 **	
義務層	まちの悪口を言われたら、自分の悪口を言われた気になる	1.007	0.854	0.941	0.702	1.001	1.070
	このまちの人たちはみんな仲間だという気がする	1.347	1.957	1.456	1.425	1.459	1.328
	このまちのためになることをして何か役に立ちたい	1.002	4.641 +	1.547	1.961 +	1.855 +	1.415
	もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる	1.602 *	1.517	1.516	2.046 *	1.177	0.924
	このまちの人たちは信頼できる	0.712	0.825	0.709	0.634	1.405	1.100
	このまちに対して愛着がある	1.134	0.898	1.535	1.077	0.599 *	1.103
	年齢(10歳毎)	0.907	1.304 **	1.509 **	1.623 **	1.659 **	0.972
性別(1=男性, 0=女性)	0.684	0.734	1.502	1.049	0.773	0.384 *	

※** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$ 消極層を基準カテゴリとして算出

表3からわかることとして4点、1点目は、義務層を除くいずれの層も「このまちのためになることをして何か役に立ちたい」がa~fすべてにおいて有意であり、オッズ比が1.984以上であることから、まちの役に立ちたいという思いが強いほど、消極層であるより潜在層又はアクティブ層である確率が1.984倍以上であることがうかがえる。

2点目は、アクティブ層において、「年齢(10歳毎)」がa~fいずれも有意であり、オッズ比はa.お祭りとf.見守りが1未満、b~eが1以上であった。このことから、a.お祭りとf.見守りは、年齢が上がると消極層ではなくアクティブ層である確率が0.860倍以下、b~eは、年齢が上がると消極層ではなくアクティブ層である確率が1.289倍以上ということがうかがえる。

3点目は、アクティブ層において「もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる」がa~fすべてにおいて有意であり、b.清掃以外でオッズ比が1以上であった。このことから、b.清掃以外において災害時に住民同士で助けあえるという思いが強いほど、消極層であるよりアクティブ層である確率が1.192倍以上であり、b.清掃においてはその確率が0.728倍であることがうかがえる。なお、潜在層においては、「もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる」で有意となったのはd.防犯、e.防災のみであり、いずれもオッズ比が1.1程度とやや

小さめであることから、当該設問が潜在層と消極層とを分けるほどの要因ではなさそうであると考えられる。

4点目は、潜在層において、「性別」がa.お祭りを除いて有意であり、オッズ比はc.町会・自治会以外が1未満であった。このことから、a.お祭り、c.町会・自治会以外は、女性と比べて男性の方が消極層ではなく潜在層である確率が0.835倍以下、c.町会・自治会は1.269倍であることがうかがえる。

以上の結果から、まちの役に立ちたいという思いが、地域活動への参加意欲に有意に影響している要因であると考えられる。また、消極層を基準として、潜在層である確率には性別が、アクティブ層である確率には年齢、「もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる」が有意に影響している結果となった。次は、潜在層とアクティブ層の違いについて焦点を合わせ、分析していく。

4.4 潜在層とアクティブ層の比較—二項ロジスティック回帰分析—

潜在層とアクティブ層の違いを探るため、地域活動a~fそれぞれで0=潜在層、1=アクティブ層とするダミー変数を目的変数に置いた二項ロジスティック回帰分析を行った。説明変数には、先ほどの多項ロジスティック回帰分析と同じものを置いている。

表4 二項ロジスティック回帰分析の結果(表中の値はオッズ比)

説明変数	a.お祭り	b.清掃	c.町会・自治会	d.防犯	e.防災	f.見守り
まちの悪口を言われたら、自分の悪口を言われた気になる	1.029	0.900	0.955	0.965	0.895	1.053
このまちの人たちはみんな仲間だという気がする	1.282 **	1.933 **	1.509 **	1.448 **	1.297 *	1.055
このまちのためになることをして何か役に立ちたい	1.217 **	1.015	1.036	1.651 **	1.701 **	1.110
もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる	1.162 *	1.477 **	1.153	1.253 +	1.368 **	1.346 **
このまちの人たちは信頼できる	1.024	0.781	0.861	0.943	1.011	1.117
このまちに対して愛着がある	1.146 *	1.078	1.038	0.974	0.859	0.899
年齢(10歳毎)	0.950 +	1.530 **	1.755 **	1.452 **	1.337 **	1.013
性別(1=男性, 0=女性)	0.806 **	1.078	0.961	1.152	1.163	0.697 *

※** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表4からわかることとして3点、1点目は、表3で義務層を除くいずれの層、地域活動a~fに対しても有意であった「このまちのためになることをして何か役に立ちたい」が、この分析モデルではa.お祭り、d.防犯、e.防災で有意であった。対して、「このまちの人たちはみんな仲間だという気がする」がf.見守りを除くいずれの地域活動に対してもこのモデルでは有意となった。このことから、まちの役に立ちたいという思いが強いほど、a.お祭り、d.防犯、e.防災においてはアクティブ層である確率が1.217倍以上、まちの人たちが仲間だという意識が強いほど、f.見守りを除くどの地域活動でもアクティブ層である確率が1.282倍以上であることがうかがえる。

2点目は、年齢も同様にf.見守りを除く地域活動に対しても有意となったが、a.お祭りの

オッズ比は1未満であり、b～eは1以上であった。このことから、a.お祭りの場合は、年齢が上がるとアクティブ層である確率が0.950倍、b～eの場合だとその確率が1.337倍以上であることがうかがえる。

3点目は、「もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる」が、c.町会・自治会以外で有意であり、いずれも1以上であった。このことから、災害時に助けあえるという思いが強いほど、潜在層よりもアクティブ層である確率が高いことがうかがえる。特に、表3でb.清掃の当該設問のオッズ比が0.728であったのに対して、こちらの分析結果（表4）では1.477であった。この点について、b.清掃においては消極層よりもアクティブ層、アクティブ層よりも潜在層の方が「もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる」という思いが強い人が少ないということがうかがえる。

ここまでの分析結果の考察として述べると、「このまちの人たちはみんな仲間だという気がする」が、潜在層とアクティブ層を分ける違いの一つといえる結果であると思われる。ただ、この結果から、まちの人が仲間だという意識が強まればアクティブ層になる確率があがる、という単純な話ではないと考える。この結果は、地域活動に参加することによって生まれた参加者同士のつながりが仲間意識を生み、そのつながりが「また参加しよう」という次の行動につながり、再度参加した地域活動でさらにそのつながりが強まり、或いは新たなつながりが生まれる、といった循環あるいは双方向の相互規定へと変わっていったのではないかと考えられる。また、その過程から「もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる」という意識を生み、強めるのではないかと考えられる。そこで、「このまちの人たちはみんな仲間だという気がする」と「もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる」の両設問の相関をみるべくスピアマンの順位相関係数を算出したところ0.346³であり、ある程度の正の相関があることがうかがえる。ただ、今回の調査・分析結果からでは両設問の順序関係までは判断できないため、あくまで相関関係の示唆までにとどめる。

「このまちのためになることをして何か役に立ちたい」について、a.お祭り、d.防犯、e.防災で有意になっていることから、アクティブ層にとって「このまちのためになること」というのは、防犯・防災という「まちの安心・安全のため」という意味合いがあるようにとれるが（もちろんa.お祭りもあるから一概にというわけではない）、見守りはまちの安心・安全とは違うのか、とも考えられる。その点については、性別がf.見守りにおいて有意かつオッズ比が1未満、つまり男性であるとアクティブ層である確率が0.697倍になることから、「まちの安心・安全のため」というよりは子どもに関心のある母親ということが要因として考えられる。また、4.2.3でも述べた通り、地域活動への参加意欲がある層は子どもと同居していることが共通点として考えられる。

そこで、地域活動への参加を促す要因として、「子ども」の存在が影響していないか検討する。保育園・幼稚園・学校という公共的な機能を持つ場は、保護者同士の付き合いを生むきっかけにもなり、ひいては地域とのつながりにも関連があるのではないかと考える。この

³ 有意水準0.01において有意であった。有効サンプルサイズは4572。

仮説についても、潜在層とアクティブ層の違いとして見られるか検証していく。

4.5 潜在層とアクティブ層の比較—子と同居しているか否か—

地域活動への参加に子どもの存在が影響しているか検証するため、先ほどのモデルに「子と同居世帯か」(1=対象、0=非対象)を追加した。この説明変数は、世帯構成を尋ねている問7で3、4、5(左から順に、夫婦と子ども、一人親世帯、3世代世帯)のいずれかを回答していたら1=子と同居対象とし、上記以外の回答であれば0=子と同居非対象とした。

表5 二項ロジスティック回帰分析の結果(表中の値はオッズ比)

説明変数	a.お祭り	b.清掃	c.町会・自治会	d.防犯	e.防災	f.見守り
まちの悪口を言われたら、自分の悪口を言われた気になる	1.012	0.884	0.929	0.961	0.892	1.034
このまちの人たちはみんな仲間だという気がする	1.293 **	1.993 **	1.571 **	1.488 **	1.309 *	1.036
このまちのためになることをして何か役に立ちたい	1.249 **	1.008	1.022	1.610 **	1.675 **	1.237
もし災害が起きたら、住民同士で助けあえる	1.151 *	1.473 **	1.158	1.250	1.373 **	1.346 *
このまちの人たちは信頼できる	0.973	0.751	0.862	0.894	0.978	1.089
このまちに対して愛着がある	1.150 +	1.092	1.021	0.995	0.868	0.869
年齢(10歳毎)	1.005	1.559 **	1.774 **	1.493 **	1.366 **	1.191 **
性別(1=男性, 0=女性)	0.761 **	1.082	0.963	1.185	1.181	0.657 **
子と同居世帯か(1=対象, 0=非対象)	2.602 **	1.322	1.135	1.515 *	1.375 *	4.918 **

※** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

b.清掃、c.町会・自治会以外において、「子と同居世帯か」が有意となり、いずれもオッズ比が1.375以上となった。特に、f.見守りにおいては4.918と最も大きい結果となった。このことから、子と同居している世帯は、f.見守りにおいては潜在層と比べてアクティブ層である確率が4.918倍であるといえる。また、a.お祭りにおいてもオッズ比が2.602と比較的大きめであることから、潜在層よりもアクティブ層になりやすい傾向にあることがわかる。

以上より、子どもと同居している世帯(以下“子と同居世帯”と呼称)であることが、地域活動への参加を促進する要因の一つであることがうかがえる。

また、4.4の末尾で述べた仮説から、子と同居世帯の中でも保育園、幼稚園、小学校に通う年齢の子どもが多いのではないかと考える。そこで、問11の末子年齢を用いてこの標本における末子年齢の分布をみしてみる。

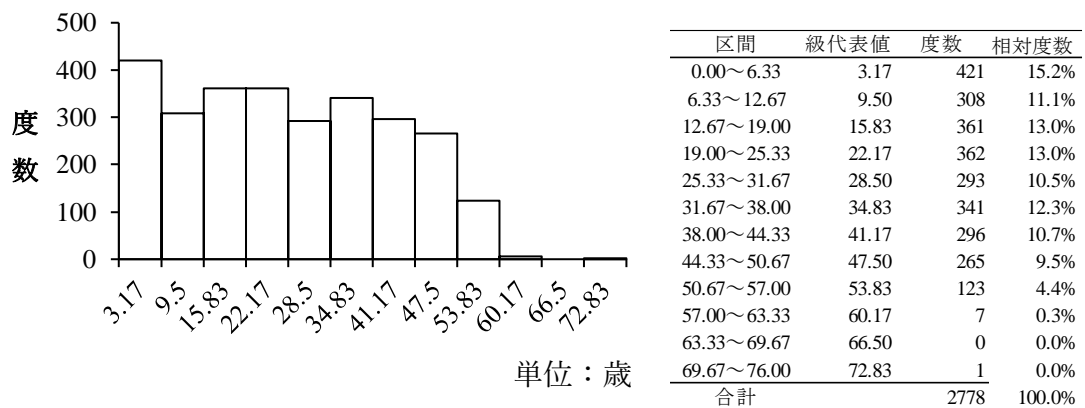


図7 末子年齢のヒストグラムと分布表

図7から、0～6.33歳が15.2%と最も多く、年齢が上がるにつれてなだらかに減少している傾向がみられた。ここから、子と同居世帯の子どもの年齢は具体的にいくつぐらいなのか、また、子どもと同居していない世帯（以下“子と非同居世帯”と呼称）の子どもの年齢との差はどれほどなのかをみるべく、問11の末子年齢を用いて両者の平均の差を比較、検定した。

表6 2群の末子年齢の平均とその差の検定結果

水準ごとの平均値

水準	平均値	標準偏差	標準誤差	95%下限	95%上限	人数 ⁴
子と同居世帯	18.229	13.646	0.321	17.598	18.859	1802
子と非同居世帯	38.050	10.211	0.329	37.405	38.695	963

t検定

差	標準誤差	95%下限	95%上限	t値	自由度(df)	p値
19.821	0.501	18.838	20.804	39.545	2763	.000

子と同居している世帯の末子年齢平均は18.229、子と同居していない世帯の末子年齢平均は38.050であり、t検定の結果によるとその差は有意であった。よって、子と同居している世帯は、子と同居していない世帯よりも末子年齢が若いことが有意に示されたが、仮説として考えていた年齢よりは高い結果であった。

4.6 潜在層とアクティブ層の比較—日頃から親しくしている近所の人の有無—

別の要因の探索として、「まちの人はみんな仲間という意識」から、日頃から親しくしている人の有無で差があるのではないかと考え、問13の「あてはまる人で、日ごろから何かと頼りにし、親しくしている人はいますか。」の選択肢を説明変数に置いた。

⁴ 24年度調査の標本サイズよりも大幅に少ないのは、問11の欠損扱いが多数存在するため。

表7 二項ロジスティック回帰分析の結果(表中の値はオッズ比)

説明変数	a.お祭り	b.清掃	c.町会・自治会	d.防犯	e.防災	f.見守り
家族・親戚	1.044	0.843	1.431	1.208	1.242	0.691
仕事関係の人(同僚・元同僚、取引先、同業者など)	0.957	1.268	1.188	1.041	0.977	0.926
近所の人(家族・親戚、仕事関係の方を除く)	2.461 **	2.060 **	1.969 **	2.112 **	1.876 **	2.270 **
これまであげていただいた方以外の友人	0.809 *	0.855	1.225	1.343	1.233	1.040
年齢(10歳毎)	0.949 +	1.540 **	1.766 **	1.452 **	1.323 **	1.032
性別(1=男性, 0=女性)	0.872	1.292	0.932	1.388 +	1.423 *	0.769 +

※** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

「近所の人(家族・親戚、仕事関係の方を除く)」がいずれにおいても有意であり、オッズ比は2前後であった。このことから、日頃から親しくしている人が近所にいると、いずれの地域活動においてもアクティブ層である確率が1.876倍以上であるがうかがえる。よって、「人付き合いの有無」が潜在層からアクティブ層へ変化させ得る要因として挙げられるといたいところだが、それは少々粗く、このモデルの説明変数においてほぼ「近所の人」だけが有意差を生んでいる点から、「近所の人」との付き合いの有無」と具体化して述べる方がより適しているといえそうである。

4.7 潜在層とアクティブ層の比較—社会貢献活動経験の有無—

次に、問33の「社会貢献活動の有無」を説明変数にし、モデルを組んだ。社会貢献活動と地域活動に共通するものとして、「社会への貢献」が考えられる。こうした社会への貢献性を持つ人は、地域活動に参加する傾向があるのではないかと考えた。

表8 二項ロジスティック回帰分析の結果(表中の値はオッズ比)

説明変数	a.お祭り	b.清掃	c.町会・自治会	d.防犯	e.防災	f.見守り
被災地支援などの災害ボランティア	1.155	2.076 **	1.799 *	2.486 **	2.020 **	1.478 *
NPOやボランティア団体への寄付	1.076	1.458 *	1.300	1.343 +	1.336 *	1.374 *
クラウドファンディングへの出資	1.063	0.765	1.139	0.801	1.031	0.953
ふるさと納税(他の自治体を含む)	1.369 **	0.739 +	0.964	0.890	0.949	1.115
年齢(10歳毎)	1.024	1.541 **	1.756 **	1.473 **	1.385 **	1.034
性別	0.832 *	1.258	0.960	1.254	1.252 +	0.711 *

※** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表8より、「被災地支援などの災害ボランティア」がa.お祭り以外で有意であった。このことから、被災地支援などの災害ボランティアの経験があると、(a.お祭りを除く)いずれの地域活動においてもアクティブ層である確率が高いことがうかがえる。4.6と同様、「社会貢献活動」というよりも、その中でも「災害ボランティア活動」と具体的にすることがポイントではあると考える。社会貢献活動といわれたら、この他にも多数挙げることができる。故に、このモデルからいえることは、潜在層からアクティブ層へ変化させ得る要因は「社会貢献活動」ではなく「災害ボランティア活動」ではないか、ということになる。

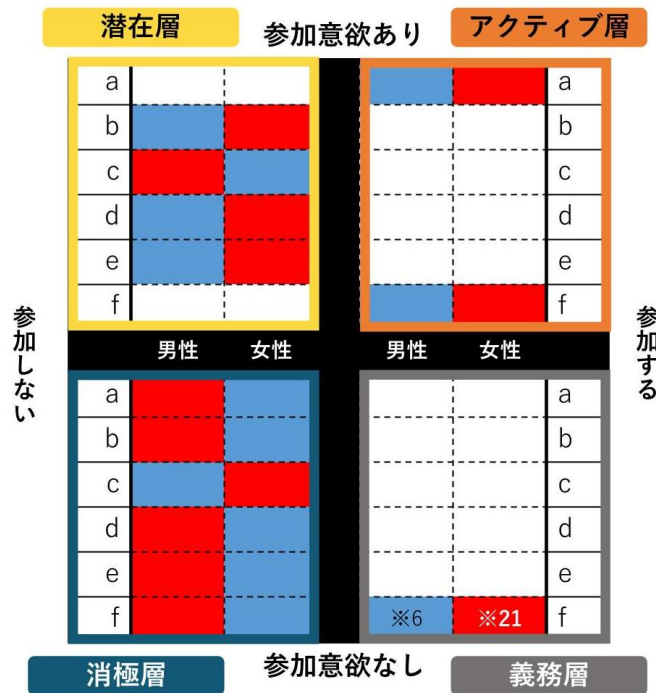


図9 残差分析による有意差の4ブロッククロスヒートマップ（性別）

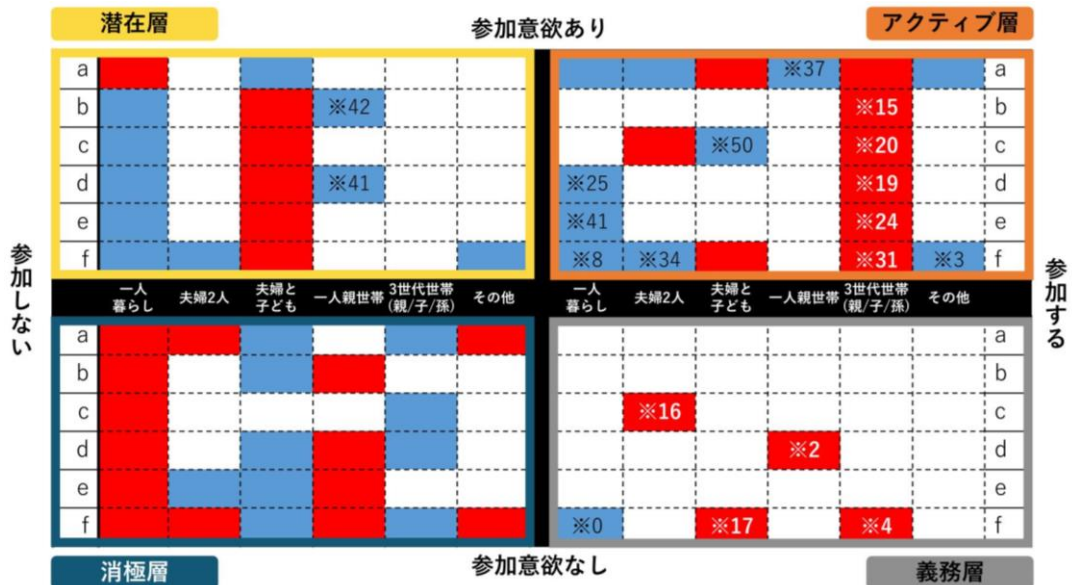


図10 残差分析による有意差の4ブロッククロスヒートマップ（世帯構成別）

基礎属性をまとめると、アクティブ層について、年齢は a.お祭り、f.見守り以外で 70 代以上が有意に多く、a.お祭り以外で 20 代、30 代が有意に少ない傾向がみられた。性別は、a.お祭り、f.見守りにおいていずれも女性の方が有意に多い傾向が見られたが、地域活動全体としての傾向とまではいえなさそうである。世帯構成は、どの地域活動においても 3 世代世帯が有意に多い。ただ、度数が少ないものが一定数あるため、分析結果の精度が粗いことは含

みおき願いたい。

潜在層について、年齢は地域活動によってまばらであり、特徴はなさそうである。性別は、b.清掃、d.防犯、e.防災において男性よりも女性の方が有意に多く、c.町会・自治会において女性よりも男性の方が有意に多い傾向がみられる。世帯構成は、a.お祭り以外で夫婦と子ども世帯が有意に多く、一人暮らし世帯が全体の割合よりも有意に少ない傾向がみられ、a.お祭りではその逆の結果がみられた。

消極層について、年齢は a.お祭り以外では 20 代が、a.お祭り、b.清掃、f.見守り以外では 30 代が有意に多く、その一方で a.お祭り、f.見守りでは 60 代以上が有意に多い傾向がみられた。性別は、c.町会・自治会以外で男性の方が有意に多く、c.町会・自治会のみ女性の方が有意に多い結果となった。世帯構成は、いずれの地域活動においても一人暮らし世帯が、a.お祭り、c.町会・自治会以外では一人親世帯が有意に多く、c.町会・自治会以外では夫婦と子ども世帯が、b.清掃、e.防災以外では 3 世代世帯が有意に少ない傾向がみられた。

地域活動参加の要因のまとめについて、図 11 は、4.3 から 4.7 までのロジスティック回帰分析の結果をまとめたものである。a~f の地域活動別で示せてはいないが、それらの大まかな傾向を束ねた参考として掲載する。

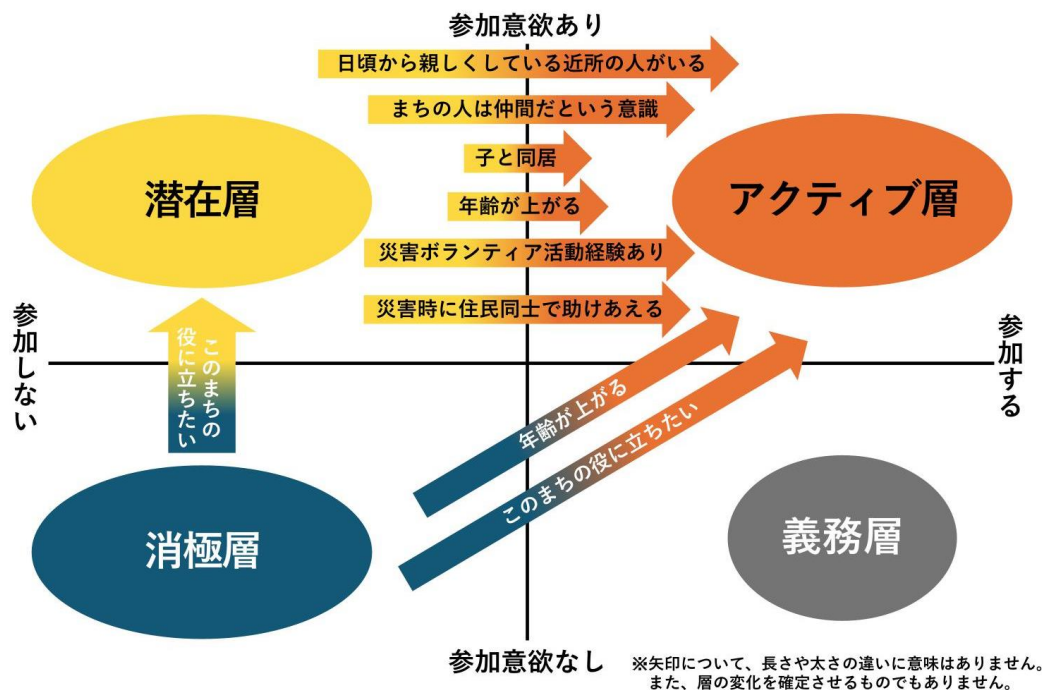


図 11 ロジスティック回帰分析で有意な関連が見られた変数

潜在層からアクティブ層へ変化させ得る可能性がある要因として、「日頃から親しくしている近所の人がある」「まちの人は仲間だという意識」「子と同居」「年齢が上がる」「災害ボランティア経験あり」「災害時に住民同士で助けあえる」の 6 つが挙げられた。もちろん、他の要因が可能性として挙げられることは大いに考えられるし、挙げられた要因が断片的

な印象を受けるのは否めないところではある。冒頭でも述べた通り、本研究は探索的な記述分析であり、本研究の目的と24年度調査の目的は異なるため、外的妥当性はかなり限定的である。故に、「潜在層が地域活動に参加するには、このようなことが求められる」といった因果推論には至らない。残された課題としては3点、第一に、調査内容の検討である。今後も同様の調査を継続して経年変化を捉えるか、あるいは本研究で掲げたクエスチョンを目的とした調査を次回実施することの検討が考えられる。二択で述べてはいるが、次回も同じ設問で時系列変化を見たとしても、地域活動への参加・不参加の理由を問うていないため、後者が望ましいと考える。ただ、調査内容全てを刷新するのではなく、本研究のテーマに関連した設問を追加したい。そこで、第二の課題は、追加する設問の検討である。聞きたい内容でありながらも回答者の負担にならない程度の数に収めたいため、追加する設問の候補として「地域活動に参加する/しない理由」「地域活動に参加したい/したくない理由」「関心のある地域活動またはイベントの種別」「平日と休日それぞれの1日の過ごし方又は好きなことに使える時間は平日と休日それぞれでどれくらいか」を、できるだけ選択式の設問として追加することを提案する。記述式を増やしてしまうと、時間や手間を要してしまい回答率の低下につながる懸念があるためである。第三は、調査方法の変更である。24年度調査は郵送法のみであったため、今回はインターネットによる回答方法も取り入れたいが、どちらにするか或いは両方可可能な形式にするかは熟慮したい点である。回答のしやすさや、若い年齢の回答数を増やすことで標本の偏りを軽減する観点からも、重要な論点であるといえる。

6. おわりに

当研究所では、2024年度から2か年計画⁵を掲げており、重点研究活動として「庁内職員及び研究所員の政策形成能力の向上」を定めている。その一環で、庁内におけるEBPMの推進を掲げていることもあり、こうした分析とその結果は意思決定に資するエビデンスとなるものになることが求められる。また、当研究所の役割⁶の一つである政策提言を果たすという文脈もあることから、本研究のテーマで述べると、今後の調査を検討・実施し、研究成果を確かなエビデンスたり得るものにし、潜在層へのアプローチに関する最終的な施策に結び付けるところまでが次なる課題であると考えている。基礎的自治体の組織の一つとして区民の福祉の増進につなげるためにも、価値を生み出していきたい。

[参考文献・出典]

- 安藤慎悟・川合春平・石橋澄子・谷口守, 2022, 「全国における地域貢献型社会参加活動の変遷—時代・年齢・世代に着目して—」『実践政策学』8-2: 175-184
- 石井俊全, 2020, 『統計学大百科事典 仕事で使う公式・定理・ルール 113』翔泳社
- 一ノ瀬善照・真鍋太一・荒井隆, 2012, 「『地域での国際交流活動の推進』に関する調査・

⁵ 本誌210ページ「せたがや自治政策研究所2か年計画 令和6(2024)年度～令和7(2025)年度」参照。

⁶ 本誌202ページ「せたがや自治政策研究所運営方針」参照。

- 研究』『せたがや自治政策』せたがや自治政策研究所 4: 229-252
- 金澤良太, 2015, 「世田谷区の市民活動団体に関する調査研究」『せたがや自治政策』せたがや自治政策研究所 7: 19-58
- 木村誠, 2025, 「地域活動への参加動機が継続同期と援助成果に与える影響—地域住民による緑化ボランティア活動を事例として—」『環境心理学研究』13: 1-10
- 栗原伸一, 2024, 『入門 統計学 (第2版) —検定から多変量解析・実験計画法・ベイズ統計学まで—』オーム社.
- 国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会, 1969, 「コミュニティ—生活の場における人間性の回復—」
- 清水裕士, 2016, 「フリーの統計分析ソフト HAD: 昨日の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案」『メディア・情報・コミュニケーション研究』1: 59-73
- 清水裕士・村山綾・大坊郁夫, 2006, 「集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用電子情報通信学会技術研究報告」106(146), 1-6.
- 生涯学習審議会, 1992, 「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について (答申)」
- 鈴木颯太・戸畑粧子, 2025, 『地域生活とコミュニティに関する調査 2024』の報告と今後の展望—『地域生活とコミュニティに関する調査 2024』中間報告書—」『せたがや自治政策』せたがや自治政策研究所 17: 3-52
- 世田谷区, 2024, 『世田谷区基本計画』世田谷区
- せたがや自治政策研究所, 2008, 「『地域活動を基盤にした協働社会のあり方』報告書」—団塊世代の地域参加拡充に向けて—『せたがや自治政策 2008』83-124
- せたがや自治政策研究所, 2009, 「『地域活動を基盤にした協働社会のあり方』研究報告書」『せたがや自治政策』1: 173-225
- 玉野和志, 2005, 『東京のローカル・コミュニティ』財団法人東京大学出版会
- 根岸亮太・後藤春彦・田口太郎・井上由梨, 2005, 「転出者の故郷における地域活動支援への参加意識に関する研究—埼玉県秩父市中宮地町からの転出者を対象として—」『都市計画論文集』40-3: 973-978
- 平原幸輝, 2025, 「世田谷区の住みやすさ・住みにくさの背景を探る—公開ローデータを用いた分析として—」『せたがや自治政策』せたがや自治政策研究所 17: 103-113
- 深川光耀, 2025, 「私発協働のまちづくり—子育て世代の特徴からみた地域活動への参加と担い手としての可能性—」『地方自治ふくおか』84: 71-91
- 本間照雄, 2014, 「災害ボランティア活動の展開と新たな課題—支援力と受援力の不調和が生み出す戸惑い—」『社会学年報』43: 49-63